

科学研究費成果報告書「日本近代史料情報機関設立の具体化に関する研究」（基盤研究
(B) (1)、平成11・12年度、代表者伊藤隆、課題番号：11490010)より

2 波多野 澄雄氏

はたの すみお 筑波大学社会科学系・教授

日 時：1999年7月29日

出席者：伊藤隆 季武嘉也 中見立夫 梶田明宏 塩崎弘明 矢野信幸
小宮一夫 有馬学 桜井良樹 西川誠 千葉功 土田宏成 武田知己

伊藤 きょうは、お出でいただきましてありがとうございます。きょうは波多野さんが随分豊富な資料を配付してくださいましたので、期待しております。よろしく願いいたします。時間は気にせずにお話くださって、途中であるいは質問させていただくかもしれませんが。

波多野 まとまった話をできないと思いますので、途中で何かございましたら質問をしていただければと思います。とりあえず2種類のレジュメのようなものをお配りしておきます。これはこのために準備したわけではないんですけれども、別な機会に話す機会がありまして、「昭和の軍事・外交史料について」というのと、「防衛庁及び関連施設における史料状況」の2種類であります。

私は外交史料館に、大学院時代からですから7年ばかりアルバイトでおりまして、そしてその後に防衛研究所の戦史室・・・当時は防衛研修所戦史室、現在は防衛研究所の戦史部と言いますが、そこに9年ばかりおりましたものですから、特に2つの史料館についてお話をしたいと思います。すでに一般的に知られている事柄についてはできるだけ触れないようにしまして、この前送っていただきました報告書の趣旨にございましたように、できるだけ未公開のものの、なかでも比較的まとまったものについて紹介してみたいと思います。

ここには書いてませんが、大学院時代に最初に私が編集に関わった史料は、村上義一さんの文書であります。村上さんのご遺族が、慶応のご出身だということで法学部に寄贈したいという申し出がございました。村上さんは、ちょうど満州事変をはさみまして、昭和5～8年まで満鉄の理事をなさっておられました。戦後は運輸大臣をなさったと思いますが、その村上さんの文書を整理しまして、それが現在、慶応の図書館に入っております。これは満州事変前後の、満鉄の改造の問題というのがあったわけなんですけれども、それを知るためには非常に役に立つものだというふうに思います。その関係で満鉄のものを少

し調べまして。

伊藤 それは、公開されているんですか。

波多野 はい、公開されております。目録も、70年代だと思いますが、「法学研究」という雑誌に掲載してございます。ただ、この前見に行きましたら、目録と合わせてみるとなくなっているものがずいぶんありました。

伊藤 それは、法学部の図書館ですか。

波多野 いえ、初めは法学部の史料室にあったんですが、最近では三田の中央図書館のほうに移管されております。一般図書と同じようになってまして、それでちょっと法学部長に申し上げまして、別に保管するというようにしていただいています。

その関係で、やはり満鉄理事の山崎元幹さん・小田原にございますけれども、あれを若干見たり。それから十河信二さんの、いま東大の社研にあるんでしょうか、ここには書いてございませんが、ああいうものを一緒に見まして。それらと合わせましても、非常に貴重なものだというふうに思います。それが最初の史料の編纂ということについての経験でありましたが、その後、外交史料館でアルバイトをすることになりました。大学院の2年の時からでありましたけれども、そこでは主に「日本外交史辞典」という、大蔵省が出版元になりまして、外交史料館が初めて出す単行本の事業に携わったわけでありまして、それは項目を拾ったりしていただいただけでありますので、特にこれといったものはないんですけれども。それが終わりましたから、大学院終了者としては初めて防衛研究所の戦史部に入りまして、そこで旧軍出身の戦史編纂官たちと一緒に、なにか仕事をせよということだったんですけれども、しかし戦史叢書の刊行はすでに終わっておりまして、何をやるということもなく、とにかく自由にやれということになりました。

まず私がそこで最初に見たのは、「機密戦争日誌」でありました。これは大学院の時代からよく知っておりまして、特に『太平洋戦争への道』などで使われているんですが、どうも出典がよくわからないということで、その多くは「機密戦争日誌」なんですけれども、まずそれを見るところから始まりました。この「機密戦争日誌」はご承知のように、ようやく去年、全文刊行になりました。昭和15年6月～20年8月3日ぐらいまでですが。これはいろいろ議論がございまして、われわれから見ますと、業務日誌ということでありまして、公文書ということになるんですけれども、ただこれは明らかにそれぞれ執筆者がおりまして、旧軍の、通称は戦争指導班と言っておりますけれども、そこに勤めていたいちばん若い将校が書くことになっておりました。それが6人おりまして、そのなかのお1人の原四郎さんという方が生きていらっしやいまして、彼が、あの記録を公表することはですね……。旧軍の意見を代表するものではないというのがひとつでありますけれども、読んでみまして、原さんがおっしゃるように、個人を誹謗中傷する部分が無きにしても非ずでした。そういう部分が非常に気になるらしく、「機密戦争日誌」は、原さんの許可がない

限り出版できないという状態が続いておりました。しかし原さんも亡くなりまして軍事史学会として交渉を続けましてようやく公表、出版が可能になったわけであります。それが「機密戦争日誌」の経緯であります。

ここに「昭和の軍事・外交史料について」というレジュメをお配りしてございます。もうひとつ、「防衛庁及び関連施設における史料状況」というほうをご覧くださいますと、簡単に申し上げまして、戦史室の文書は3通りに分かれます。厚生省が移管した資料ですね。現在の厚生省資料の全容は「厚生省保管資料一覧」というのがございますけれども、これをぜひとも揃えられるといいのではないかと思っております。かなりの量であります。「厚生省保管資料一覧」は恩給や軍歴調査の基礎データの目録で、防衛庁に移管した資料の残りの部分だと思います。つまり、厚生省からの移管資料が防衛庁資料のひとつのまとまりということになります。

「戦史部収集資料」というのは、これは編纂官たちが独自に集めたもの、あるいは旧軍の方々がすすんで寄贈したり寄託されたものであります。「戦史叢書」という、102巻におよぶ書物をご承知だと思いますけれども、1958年に戦史室ができて、10年間で史料を収集する、後の10年間で執筆をするという計画でした。ほぼ計画どおりに進みまして、最初の10年間に集めた史料がこれということになります。あとの10年間で102冊を書くわけですから、1年にこんな厚いもの10冊を書くわけですから、それはすごいエネルギーだなというふうに、現在でも思うんですけれども。100名を越える旧軍の人達が編纂官として関わったということでもあります。

もうひとつの種類は、アメリカの返還文書でありました。これは2回に亘って、外交交渉によって返還を求めていったわけでありますが、ご承知のように、旧軍のものだけではないんですけれども、占領中に米軍が接収しまして、その返還を求めた。5年におよぶ外交交渉の末、1958年に9000何件かの資料が返還されました。2回目も74年なんですけれども、この時になぜか戦史部のほうに軍需省、商工省の大量の文書が返ってきたわけです。これは1943年から44年にかけての軍需省、商工省の文書でありまして、箱に入ってたまま、500箱ぐらいが返ってまいりました。ようやくその整理が終わって、いまは利用できる状態にあると思っておりますけれども、そういうものも含まれておりました。

伊藤 あれは、アメリカ軍の使うボックスのなかに詰め込んでいったんだけど、厚い簿冊を半分に切って入れてありましたですね。

波多野 そうなんですね。それで、どうもナショナルアーカイブズで見ると、ああいう整理の仕方とは違って（笑）、結局そのボックスそのものがあまり重要ではないということがわかって、全部取り出してしまって、また編集をし直したというのが実際ですね。

返還文書は、まだかなりの部分が残っていることがわかっております。2000件ぐらいのものが、まだ未返還のまま残っていることがわかるんですが、何が残っているかという

ことは、ここに書いてございます「陸海軍記録文書目録」に詳しく書いてあります。これは、アメリカが返還する時に、マイクロフィルムに撮ったわけですね。それはすでに日本でも市販されておりますので、よく知られております。しかしそれをもとに、戦史室のほうで改めて返還文書を確認した作業をまとめたものであります。若干、マイクロフィルムで撮ったものと市販されているものと、異なっているわけですね。

伊藤 返還された時に、全部が防衛庁に行ったわけではないんですね。

波多野 そうですね。防衛庁だけではなくて、大蔵省に行ったものもございます。

伊藤 公文書館に行ったものもあるんですか。

波多野 ええ。ただ、この 58 年の返還はまだ公文書館はできていなかったものですから、たぶんどこかに行ったんだらうと思うんですが。確かに軍の文書だけではありませんでしたので。

伊藤 74 年の時は、あちこちに分配したみたいですね。

波多野 はい、分配しましたね。

伊藤 なんで軍需省とか商工省がね。

波多野 行き先が、わからなかったのかどうかわかりませんが（笑）。軍需省というと、どこになるのかなという感じなのかもしれませんが。

より完全なものは、田中宏巳さんという防衛大学の先生が、去年こういう目録を出しておられまして、これは接收文書の全容を知るためには非常に便利なものであります。

伊藤 これは、接收されて現在向こうにあるものの目録ですか。

波多野 向こうにあるものと、それから接收して返還されてきたものの両方ですね。

伊藤 返還されたものも入っているわけですか。

波多野 はい、入ってます。ただ、細かい 1 点 1 点の文書というわけではないんですね。母冊です。

戦史部が所蔵している資料は、こういう 3 種類に分かれるわけです。だいたい全部で 13 万点ぐらいになります。やや詳しく見ますと、まずは公文書類と私文書の類に分かれるわけですが、収集先ということで分けますと、公文書類は、いま申しあげましたように返還文書が、ここに書かれてあるようなものが陸海軍にございます。

伊藤 「大日記」とか「公文備考」とか、こういった類は返還文書なんですか。

波多野 はい。返還文書がなければ戦史室もできなかったということなんですね。

伊藤 これは、58 年に返った分のなかに入っているわけですね。

波多野 そうですね。返還文書という区別はしておりませんが、返還されたものが中心になっております。

伊藤 これはやっぱり、旧陸海軍省参謀本部とか、そういうところから持って行ったということになりますかね。

波多野 そうですね。接收する時に、わざと隠匿したものもけっこうございまして、それが陸海軍とも、とくに陸軍の場合は南多摩郡だったかどこかに隠匿したわけですね。それが大本営政府連絡会議の議事録と、それから「機密戦争日誌」もそうなんですね。それから御前会議の議事録。そういったものは当時、陸軍省の庶務課の将校の手によって意図的に隠匿されました。そういうものも含まれているわけです。

伊藤 それはこの分類のなかには入っていないわけですね。

波多野 ええ、入っておりません。

私文書の類は、戦史部が独自に集めたものであります。戦史部が委託をして執筆をしていただいたものと、これは様々な形態のものがあるわけですが、300冊ぐらいございまして。これを公開するかどうかということが一時、下のB、Cと合わせまして議論してきたわけでありまして、基本的には委託執筆の資料にしろ日記にしろ、遺族ないしは本人の了解があれば、基本的にいまは見せることにはなっております。

伊藤 委託して書いてもらったものをタイプに打って、その一部を本人に渡しているから、本人が出しちゃえばもうそれまでと。

波多野 そういうことです。委託をされているだけのことで、所有権は移っていないということもありまして、そうされる方がけっこういらっしゃいました。ただ、戦史の編纂のためだけに利用されたいという要求のものもけっこうあったようでありますので。それ以外の目的のためには利用できないというような種類のものもあるようですね。

伊藤 いまのところ戦史部としては、遺族と交渉して云々ということはやっていないわけですか。

波多野 積極的にはですね。求めに応じて、交渉のための住所を教えたりということはしますけれども。ただ、何が委託資料なのかということも……。あそこの戦史室にいても、これが委託資料だというインデックスがあるわけではないんですね。いろいろな分類のなかに入っていて、それと思われるものということになるわけですね。

伊藤 そういうのはカードには出てこないわけですか。

波多野 いや、出てきているものもあります。いちばんいいのは、「戦史叢書」の索引とといいますか、注を見ていただいて、そこに載っているものをおたづねいただく方法もあります。

回想録、日記・日誌、手帳、メモ、だいたい14000ぐらいございまして。これも同じような扱いになってございまして、どういうものがあるかということも、やはり「戦史叢書」の注を見ていただくとわかります。

それから、「戦史叢書」ではヒアリングの記録が多用され、延べ13000人にも及ぶヒアリングをやっているんですが、テープに録っているのはほんのわずかなわけです。ほとんどが編纂官が出掛けて行って、メモをとって、自分のメモを見ながら戦史を書くのに活

かすというようなことで、終わるとそのまま捨ててしまったりするのがほとんどなんですね。それで、「戦史叢書」に引用されている場合もほとんど残っていないわけですね。ここに書いておりますように、逆に言いますと、ヒアリング記録という点では、「戦史叢書」に書かれているものが唯一のものだということになるわけです。

伊藤 テープも、かなり残ってることは残ってるでしょ。

波多野 ええ、テープは残っております。断片的ではありますが。

伊藤 編纂官個人が持っている場合もあり得るわけですね。

波多野 あり得ます。述べ 130 人ぐらいの人が関わったわけですので、1 人 1 巻主義でありますから、1 人 1 冊を担当した方が、全部抱えていらっしやったわけですから。それぞれの編纂官を当たっていけば、おそらく自宅に保管されている場合もあるだろうと思います。

伊藤 あれは、各巻に担当者の名前が書いてありましたよね。

波多野 あります。たとえば原四郎さんなんかは、『大東亜戦争開戦経緯』という 5 冊を書かれたんですけども、彼は残していかれませんでした。いちおう個人のコレクションとして、これには図書も含まれていますけれども、そういうものもあります。西浦進さん、初代の戦史室長ですけども、彼は直接は執筆されませんでしたけれども、やはり自分のコレクションを残していかれませんでした。

伊藤 ここに「主な個人コレクション」と書いてありますけれども、そのなかには入っていない？

波多野 ええ、これほど量がないものですから。残ってるテープは、2 ページ目のその他のところに書いておいたんですけども、これら目録のないその他という分類に入りますが、先ほどのテープがある方は、だいたい 100 本ぐらいは残っております。

その他の A から I までございますが、「軍需省、商工省……」は、先ほどご説明しましたような返還文書ですね。それから軍人談話テープは、「戦史叢書」に使ったもの。そうでないものが若干ありますけれども、それも残っております。ただ、これを起こしているかどうかということについては、定かでないんですけど。

それから「戦史叢書基礎案」というのがありまして、これは「戦史叢書」をつくる場合に一次草稿、二次草稿というのをつくりまして、最終的にああいう本の形をとったんです。これが膨大な草稿が残っております。草稿のなかで、出版されなかったものもあるわけですね。たとえば「南方の軍政」という、後で資料集として出版しましたけれども、あれは不破博さんという方が書かれて、すでに原稿はあったんです。東南アジア軍政について書かれたものなんですが、それが出版の時にいわゆる政治的な問題があって・・・アジアの解放かどうかというような問題だろうと思うんですが・・・出版は控えられまして、その草稿も残っているわけです。で、「戦史叢書」が終わりましてから、その草稿そのものではな

くて、そこに使われた資料を出版したということですね。それが『南方の軍政』という資料集ということになります。

Dのところは「終戦処理関係史料」というのがございます。これは、返還文書ではないんですけども、厚生省から返還された文書の一部でありまして、ほとんど整理がされていないものでありました。特に満州における終戦と、復員、そして引揚げ、そして陸海軍の解体というようなものがここに含まれております。この整理にあたっておられたのが中山隆志さんと言いまして、いま防衛大学校の先生ですが、彼が、満州の部分については整理をされまして、自分でも本を出されました。『満州の日ソ戦』だったでしょうか、その本に使われました。そして満州以外の部分では、有末機関のものがございます。これは横浜にできました連絡機関ですが、有末精三さんが機関長になりまして、GHQとの初期の折衝に当たったんですけども、その関係の電報、資料類です。これがだいたい、簿冊にして5つぐらいございました。

伊藤 いつ頃までの部分ですか。

波多野 45年11月ぐらいまでですね。有末機関は10月ごろ解散すると思うんですけども。

Eと書いてございますのが、これは戦史部で研究にあたりました、戦史編纂官ではないんですけども、個人研究としてなされた研究資料というものがたくさんあるわけですね。それはだいたい100冊か200冊しかつくりませんから、みな部内印刷をして残されていくわけなんです。このなかには非常に役に立つものもございまして、たとえば「陸軍情報組織の変遷」という部内配布の研究資料があるんですけども、これなどは非常に情報という観点から軍を見るには体系的でいいものだと思うんです。これらはほとんど、戦史室に行っても公開しているわけではありませぬので、部内に配付してそのまま私蔵されてしまうというのがほとんどですが、これそのものを出版される方もいるぐらいですので、これを何とかまとめてですね。

伊藤 これは執筆者名が入っているわけですね。

波多野 それぞれ入っております。何とか公開するように、お願いはしているんですけども。

Fは教範、典範類。これは当然ですね。ネガフィルムおよび写真。軍歴カード。航泊日誌。軍用の地図。絵画。それからBC級戦争裁判記録。戦犯の記録なんですけども、これらは多くはありませんが。

伊藤 法務省の戦犯資料室というのは、いまあるものなんですね。

波多野 これが入ったのが昭和40年代のことだろうと思うんですけども、法務省の法務調査部に豊田隈雄さんが仲立ちになりまして、「戦史叢書」に必要なものを戦史部のほうから依頼したということですね。それに応じてこちらでコピーをさせてもらったものと

いうものです。原本ではないんですけども。

伊藤 いまでもこの原本は、戦犯資料室にあるということですか。

波多野 法務省のなかですね。

伊藤 これは、法務省は公開はしないですよ。

波多野 まだ公開はしてません。ただ、後でも触れますが、外交史料館のものは、去年の第13回公開で公開をしましたね。目録は持ってきましたけれども。

4番目は、これは比較的まとまったものであります。「柚原史料」と言いまして、第一復員省の事務官で史料担当官でありました柚原さんが、半ば個人と言ってもいいんですけども、それを復員省の返還資料とは別に寄贈されたものであります。これは非常に貴重なものが含まれておりまして、終戦の処理と復員関係の史料です。

「宮崎史料」というのは、宮崎周一さんの史料ですね。これも終戦の頃が多いんですけども。

「榎本資料」というのは、榎本重治さんですね。ワシントン会議の時から戦後の海上自衛隊の昭和30年代まで、ずっと海軍の国際法の顧問のような役割をなさっていた方です。ワシントン、ロンドン、ジュネーブといった軍縮問題については、それまでは海上自衛隊の幹部学校にあったんですけども、重要なものはいまは戦史部に移されまして、一カ所にまとまっております。

伊藤 僕は最初の本を書いた時に、榎本さんに会いに行っているいろいろ頼んだんですけども、とうとう駄目でした。

波多野 「千代田史料」というのは、明治天皇、伝記史料ですね。あとの島田、石原、片倉というのは、全部コピーであります。大東文化大学の海軍史料は、大東文化大学で出版中です。まだ出版してるんでしょうか。まだ継続中なんですか。

伊藤 まだ終わってないんじゃないかな。これ、調査課の史料ですね。

波多野 主にそうですね。これは写しであります。佐々木到一さんの史料も写しなんですけど、渡部渡さんという人も、これも写しがあります。

5番目の「特殊な図書類」というのがありますね。部隊史、沿革史（師団史、連隊史、大・中・小隊史、学校史）。学校史というのは、陸海軍の学校の学校史でありますけど、戦史部を利用してこの部隊史を編纂されると必ず1冊は寄贈されるということで、それを集めているというか、自然に集まっているということでもあります。

伊藤 これは、使うことはできるんですか。

波多野 ええ、まとめてインデックスがありますし、そして『軍事史学』の雑誌に、私家版情報コーナーというのを設けまして、そこで逐次、紹介するようにしているんですけども。

次の陸軍経理学校の図書。これはまとまったコレクションとしては、図書としてはいち

ばん多いものです。「水交社記事」とか、陸軍省の年報とか、海軍省の年報。陸海軍省の年報はすでに復刻版が出されました。

防衛研究所の図書館のほうですけれども、現在、独自の図書館というのがなくなりまして、目黒の統合図書館のほうに移管されました。自衛隊の各学校が統合されて目黒に移ったんですけれども、その統合図書館というのがありまして、同じ敷地のなかですけれども、図書についてはそこに移されたと聞いています。

伊藤 あ、そうですか。そうすると、いままでは図書館のなかに、さっきおっしゃった戦史史料室所蔵のものが入っていたわけですね。

波多野 そうですね。戦史史料室のなかにも図書があるんですが、その図書は動かさなかったと聞いています。

伊藤 いままではだけど、あそこにあったのは防衛研究所の図書館というふうに言っていたと思いますが。

波多野 図書館の戦史史料室と言っているわけですね、あの建物を。

伊藤 あ、そうですか。

波多野 図書館は別にあるんです。それは戦史の図書はほとんどないんですけれども。それが近くにあったんですけれども、それをまた移しまして、統合図書館をつくったということですね。

伊藤 そうすると、いま戦史部のところにあるのは、防衛研究所図書館戦史史料室なんですか。

波多野 ええ、そうです。あの建物全体が戦史史料室ということですね。

伊藤 それの図書館になったわけですか。

波多野 条件も内容も変わっていないと聞いています。まだ分館のような感じですね。

海上、陸上、航空の3学校が統合されましたので、その図書も一緒に目黒に統合したわけですね。

伊藤 前に海上幹部学校なんかで持っていた資料類は、どうなったんですか。

波多野 資料類はまだそのままのようですね。とりあえず図書を統合したようです。

伊藤 あそこで独自に資料を持ってましたよね。

波多野 まだ持っているようです。それで、図書は目黒のほうへ行きましたので、それも統合図書館のほうに行くか戦史部に行くかという議論をしているようですけれども。

3番目は、防衛庁図書館・六本木の図書館ですね。防衛大学の図書館、技術研究本部、これは返還文書の3分の1ぐらいは技術のものだったんですね。特に海軍の技術関係の船体実験とか、あるいは燃料の実験とか、そういった純技術的なものは技術研究本部のほうに移りました。

6番目の自衛隊駐屯地の史料館。自衛隊駐屯地の史料館というのは、おそらく 150 ヶ

所ぐらいあるだろうと思われるんですけども、それぞれ非常に小さいんですけども、地元の旧軍人や遺族がそこに寄贈したものがけっこうあります。もっとも文書史料だけではないんですけども。これは遺族会が調査した記録がございまして、「自衛隊の駐屯地に置かれている史料館等」という調査記録があります。きょうは持ってこなかったんですが。もうひとつ、どういう史料があるかというのには、それぞれの陸海空の幕僚監部が作成した詳しい総合目録があります。

伊藤 それぞれにですね、これは。

波多野 ええ、陸海空、それぞれにつくったものがあります。いちばん大きいのは、たくさんあるのは陸ということになりますけれども。

次の、史料調査会海軍文庫というのは、第二復員省の史実調査部のもとに集積された海軍の資料であります。原資料が多いんですけども、「大海令」といった、大本営海軍部命令とそのつづり、非常に貴重なものもあります。ただ、これは今年開館しました昭和館に全部移りまして、職員もそっちのほうに移って来ました。

伊藤 なんか僕の見た感じでは、個人文書もかなりあったような気がしましたけれども。

波多野 そうかもしれませんね。戸高さんという、長く海軍文庫にいらっしゃった方も、いまも昭和館の史料専門官としていらっしゃいますから。

伊藤 一度、戸高さんの話も聞いたほうがいいですね。

波多野 彼に一度、聞かれるのがいいかと思うんですね。偕行社の図書室は、ほとんどここは図書だろうと思うんですね。ほかに水交会の図書室。

伊藤 目録ありというのは、出された目録があるというのではなくて、そこに行くと目録があるという意味ですか。

波多野 そこに行くとあるという意味です。水交会のほうも同じですね。水交会のほうは、面談の記録をつくっておりますね。談話テープで起こしてあるのが30人ぐらいありまして、これは非常に貴重なものです。海軍歴史保存会は、いまはもうないんですけども。

伊藤 あそこの集めた資料は、戦史部に行ったんじゃないかな。

波多野 そうですか。保存会として、何か史料集のようなものを出された……？

伊藤 出すつもりだったわけですけども。ちょっと書いてあった、嶋田さんの日記とか岡敬純日記とか、あれはいちおう話はしたんです。それで、両方とも確か預けられたような気がするんですね。特に岡さんのやつは。全部密封して、そして解散する時に、僕は戦史部へ行ったのかなと思ったんですが、どうも家族のところへ返したみたいですね。

波多野 そうかもしれませんね。僕も、戦史部に行ったという話は聞かないんですけども。

伊藤 じゃあ、家族に返したんですね。

波多野 さっき話の出ました海上自衛隊幹部学校の図書室は、自衛隊の学校のなかでは非常に貴重なものを持っております。先ほど申しましたように、いろいろな文庫類があるんですけども、文庫類の図書の部分は統合図書館のほうに移管しているはずですよ。

12番目の陸上自衛隊幹部学校の図書室というのも市ヶ谷にありましたが、これは先ほどの目黒の統合図書館のほうに移管されたようですよ。

13番目の衛生学校の図書室は、後で紹介いたしますけれども、陸軍の軍医学校関係の資料が大量にございました。

伊藤 金原資料は、防衛研究所に移管と書いてありますね。

波多野 金原さんは陸軍省の医事課長だったんですが、戦後衛生学校長をなさったものですよ。その資料がここにあったんですよ。これは全部、戦史部に移管しまして、いま整理している最中ですよ。

伊藤 確か、「国家総動員史」に一部出てるでしょう。

波多野 そうですね。あれは原本と抄録がありまして、抄録のほうが出てるんですよ。それも部分的なんですよ。

伊藤 じゃあ、全体はかなり大きなものなんですよ。

波多野 そうですよ。目録は持って来ましたが、コピーはないものですよ。これは置いていきますけれども。

だいたい以上のような、戦史部のほうの、防衛庁の関連の施設をご説明したんですが、そこでもう1枚のほうに戻っていただきまして、防衛研究所戦史部史料というなかで、私が9年ばかりおまして、まだ未公開で非常に貴重だなどというふうに気になったものだけをちょっと取り出してみました。

石井秋穂さんという方は、陸軍省の軍務課長でした。開戦の時には軍務課員でありましたが、開戦間もなく南方に行かれたんですよ。それまでの日記があります。これは、三国同盟の頃からのもので、非常に貴重なものです。また詳しい回想録がありまして、これは昭和13年頃から20年までですよ。20年というよりも、18年にドイツに連絡士使として派遣されるんですよ。そのまま帰ってこれなくなって向こうにいたという人なんです。その経緯も書かれておまして、特に開戦前後の回想の部分は非常に有用なものです。

伊藤 これは「戦史叢書」にずいぶん引用されていますよね。

波多野 はい、されております。まとまった回想録としては、旧軍の人のなかでは非常にいいものだというふうに思います。

次の甲谷悦雄さんも、やはり同じ頃、彼は参謀本部の戦争指導班を中心に勤務された方ですよ。彼の日記もあります。量的にはそう多くないんですが、日記と合わせて回想録もあります。そこに書いておきましたような経歴の方ですよ。

それから「田中新一中将業務日誌」「回想録」「手記」。これは、回想録、手記と称するものが無数にありまして、どれがいったい本物なのかというのが、どうも判然としないわけですね（笑）。手記も何種類かありまして、日誌もいまひとつ信憑性に欠けるのは、原本がないものですから全部コピーなんですね。どうも後から貼り付けてコピーをとったと思われるようなところがけっこうありまして。いま公開しているんですけども、これを出版したり利用したりという場合には、ちょっと問題かなと思う部分が多いんです。ただ、期間としては昭和12年～18年という期間でありますし、彼の役割からしても非常に重要なんですけども。

伊藤 これは全部コピーなんですか。

波多野 コピーです。「回想録」で書かれたものは、コピーでなく自筆のものもありますけれども、日誌については全部コピーです。

伊藤 田中家に原本があるということですね。

波多野 そういうことですね。

次が、先ほど申しました金原さんです。これはアジア女性基金の委託でコピーをとりました。日誌以外にも資料があるんですけども、主に昭和12年～18年までの業務日誌と、業務日誌の摘録、同じ時期のものですね。

伊藤 摘録のほうが多いんでしょう。

波多野 業務日誌をご本人が正確に起こされたものですね。読みやすく、原稿用紙に起こされたものです。それが摘録であります。文章は若干、違っているんですけども、内容はほとんどそのままなんです。

伊藤 元のは速記で書いてるようなことを聞いた気がするんですけども、そうなんですか。

波多野 いや、速記ではありません。読みにくいですけども、自筆のものですね。これが貴重なのは、医事・衛生の関係がわかるというだけではなくて、陸軍省の会合が・・陸軍省の会報と言いましたけれども・・月に何回かあるんです。課長だけの会報（会合）、そして局長会報・・局長会議ですね。その会議の速記録が、非常に細かく記載されていることなんですね。特に昭和16年の春頃から18年までの局長会議の速記録というのは、非常に貴重なものだと思います。陸軍省の局長会議には課長も出るんですけども、たとえば東條さんが出て何を話したとか、武藤章軍務局長が何を言ったかということが克明に書いてありまして、非常に貴重なものだと思いますね。

伊藤 「国家総動員史」に出ているのは、ほんのわずかなんですね。

波多野 ほんのわずかですね。その部分だけでも、会合の部分だけを拾ってもかなりの量だと思います。もちろん、この医事・医療に関する資料もその間にあるんですけども。

大塚文郎さんというのが金原さんの後任医事課長だった方でありまして、備忘録という

のがあります。ただこの備忘録のほうは、ほとんど専門的な医事・医療に関する記述だけ
であります。いまのように、それぞれの陸軍省内の会合の速記録というわけではありませ
ん。金原さんと大塚文郎さんは、すべてコピーを撮ったのは……。アジア女性基金とい
うのがありまして、私がアメリカにいる時になぜかその委員になってしまいました。たぶん
防衛庁にいたからだと思うんですけども、帰国しまして資料の専門委員会の委員なるも
のをやることになりました。それで、慰安婦関係の資料を探すという任務を受けてしま
いまして、この2つを見たわけですね。報告書は出しましたけれども。そのアジア女性基金
の資料委員会は、外務省も、外政審議室もだんだんと熱心でなくなってきました。いま開
店休業の状態のようですけども。

次の増田繁雄さんという人も、期間は短いんですけども、整備局の方ですが、なか
なか貴重なものです。

「東久邇宮日記」は、いろいろ曰くがあったものであります。『戦史叢書』に引用さ
れている最初のものを持ってきてみたんですけども、刊行されているものとは、同じ部
分もあるんですけどもかなり違くと。これが元の東久邇宮の日記です。私はこの東久邇
宮家に何回か交渉をしましたけれども、少なくとも亡くなる前だったものですから。まだ
その後は、手を付けていません。この日記を見ながら、誰かが刊行されている東久邇宮の
日記を書いたというふうに思われます。

伊藤 これはご本人の自筆なんでしょうね。

波多野 そうですね。

伊藤 僕は、出版されたあの日記を使うのは非常に危ないと思って。

波多野 これは昭和16年1月から、総理大臣の時代を挟んで昭和20年12月までですね。

伊藤 挟んでというのは、含んであるんですね。

波多野 含んでいます。つまり、皇籍を離脱するまでの日記ということになりますが、内
容は非常に面白いものですね。戦時中、首都防衛司令官か何かをやっていて、暇といえ
ば暇なんですね。それでいろんな人がやってきて、いろんな話をしていくのが、非常に面白
いですね。

伊藤 総理大臣時代はどうか。

波多野 総理になる時の経緯がありますね。8月18日の前後の経緯があります。その
後、総理大臣になってからの記述はそう多くなかったと思うんですけども、しかしそれ
にしても面白いものです。

伊藤 石原との関係とか、密接だったようですね。

波多野 そうということがわかりますね。

伊藤 これは、遺族は全然駄目なんですか。

波多野 いえ、駄目ともいいとも言っていないわけですね(笑)。美空ひばりの家の近

くにあるんですが、何回も行こうとしたんですけども、ちょっと敷居が高くて。手紙だけは2回ばかり出してあるんです。

伊藤 今度、軍事史学会でやりませんか（笑）。

波多野 そうですね。戦争が深まっても、毎日必ず新宿御苑でゴルフをやるんですね（笑）。寝るまでのことが詳しく書いてあるんです。

「奈良武次日記」は、もうすぐ柏書房で出ます。ただ、これは部分的なものです。大正元年から亡くなる昭和37年まで毎日欠かさず書いてるわけですから、すごい量になります。

伊藤 結局、何年から何年までを出すことになるんですか。

波多野 大正9年～昭和8年まで、侍従武官長の時代をまず出すというふうになりました。

伊藤 それで何冊ぐらいなんですか。

波多野 それで5冊です。その前後も非常に貴重なんですけども。その前は東宮武官長でしたね。あとは枢密顧問官の時代がありまして、2・26事件の対応とか、そういうのは非常に貴重なものだと思うんです。とりあえず侍従武官長の時代を出します。

真田さんのものは、まだご遺族が北海道にいらっしゃいまして、これはいつでも見られるんですけども、ただ量のわりには期間が短いんですね。しかも戦争中の話でして、非常に読みにくいという点があります。

高嶋辰彦さんの日誌、4冊とありますが、これも期間が短いんですが、汪兆銘工作を挟んで内容は非常に貴重なもので、面白いものです。

先ほどありましたけれども、渡部渡の日誌ですね。25軍ですから、マレーですか。軍政部長をやりまして、企画院の人ですが、その前後の日記というよりも、その時々を書いた記録なんです。これは前の南山大学の先生の明石陽至さんが中心になっている、マレーにおける日本軍政の研究という、トヨタ財団のプロジェクトでマレーにおける日本軍政の資料収集をやってらっしゃるんですが、そのなかに入る予定なんです。

次は井本さんの日誌ですね。これは非常に小まめに、人柄がよく出ている日記なんです。ただ、記述としてはあまり面白くはない資料ですね。量は多いです。「尾形健一大佐業務日誌」というのは、非常に貴重なものだと思うんですね。17年～20年まで、最後の陸軍の侍従武官なんですけども、これは非常に読みやすく内容もあるものだと思います。ここには書いてないですが、海軍の侍従武官では野田六郎さんの日記があるんですけども、非常に短いものです。

海軍のほうでは、右のページですが、「嶋田繁太郎日誌」、それから先ほど話が出ました「岡敬純日記」。私は2つとも見てはおりますけれども、まだ公開は許可されていないということのようでもあります。岡敬純のほうはコピーがいちおう戦史室にはあります。

伊藤 でも、非公開でしょ。

波多野 ええ、そうです。藤井茂、石川信吾といったところは、森山優さんが『日米開戦の政治過程』という本のなかで使われていまして、森山さんが発掘されたようなものがあります。

伊藤 いや、あれは僕が発掘したんですよ（笑）。

波多野 私のお祖母さんが藤井さんの親戚だったものですから、これは知ってたんですが、戦史部に入った経緯は私はよく知らないんですけどね。

伊藤 戦史部に入ったんですか。

波多野 いえ、戦史部じゃないと思いますが、いちおうコピーは戦史部に……。

伊藤 いやいや、あれは僕が借りてきて、コピーをつかって、それで森山君と半分ずつ分けて起こしたんですね。それで、彼が使いたいというから、どうぞご自由にお使いくださいと。というのは、後で遺族のところに許可を求めに手紙を出したら、戻ってきちゃったんですよ。それで行ってみたら、家がないんだ（笑）。それで近所の家へ聞いたんですが、どこへ引っ越したのかわからないということで、行方不明になっちゃったんです。だけど、これは戦史部にあるんですか。

波多野 ええ、あります。

伊藤 原本が？

波多野 原本じゃありません、コピーです。

伊藤 ほんと、どうしちゃったのかわからないんですね。

波多野 親戚がいらっしゃって、その関係で接触はできたんですけども。確かに藤井さんのご家族そのものは、直接の親族はもういらっしゃらないですね。

あとの土井美二さんとか佐薙さんは、量はそう多くはありませんけれども、開戦前後の海軍の動きを知るには、上の日記を補うような部分があります。榎本さんのものは、先ほど申し上げました。

それから、戦史部に一部あるものとして、占領軍の歴史家がつくった陳述録というのがございます。これはGHQ総司令部が昭和24年～25年にかけて、日本政府、軍の要人に対して面談を行った、その記録であります。この目的は、マッカーサー戦史をつくるためだと言われています。実際、66年に生まれたマッカーサーの戦史には使った形跡があるんです。しかもマッカーサーが、オーストラリアからフィリピンにやってきて、それで日本にやってくるという、軍人さんについては、その経過に沿ってインタビューもなされているようなところがありまして、たぶんそういう目的のためだったろうと思われま

そこで日本側で協力されたのが大井篤さんだったんですね。亡くなられましたけれども、大井さんがほとんどこれを持っていらっしゃいまして、刊行される予定であります。日本人が原本で、それを英訳してアメリカ側で利用したということになるんですけども、英

文のほうは議会図書館に残っています。これはかなりの量で、戦史部も一部しかないんですけれども。政府、軍の、だいたい太平洋戦争開始から終戦までの間ですが、そこを中心に話を聞くというスタイルをとっております。

伊藤 木戸さんの分は、木戸さんもコピーを持ってたから。タイプで打って、あれも本人に渡したみたいですね。

波多野 そうですね。小磯国昭のものも、「歴史と人物」だったのでしょうか、先生が紹介されてましたですね。東郷茂徳とか、そういった人たちの。

伊藤 ずいぶんあるんですね。

波多野 ずいぶんあります。

伊藤 ついでにちょっと、大井さんの資料はどうなったんですか。

波多野 大井さんそのものの資料ですか。

伊藤 ええ、いろいろ持ってらした資料。戦史部が獲得したような話を聞きましたが。

波多野 いや、私は聞いてませんね。ただ、これについては別なんですね。

伊藤 この資料は確か、防衛庁戦史部が手に入れたと聞きました。

波多野 日記もあるようなんですけれども。

次に、外務省のことを若干、申し上げたいと思います。外交史料館のものは特に申し上げることもないんですけれども、2つ、3つのことをちょっと触れてみたいと思います。

「外務省執務報告」というのがあります。これは公文書ではありますけれども、各局課別にそれぞれ毎年次、その報告書をつくりました。これは外に公表することを前提としておりませんので、その年に、たとえば東亜局が扱った出来事を詳しく書いて残すというものであります。期間が、昭和11年から長くても昭和17年までということで、毎年、毎年これをつくっていたんですけれども、これは非常に読む価値があるということで重宝していました。これは全部、刊行されておりますね。クレス出版というところで刊行されていることを、最近知りましたんですけれども。

伊藤 刊行されているんですか。

波多野 ええ、刊行といいますか、復刻版ですけど。「外務省公表集」なんかも、全部売ってます。

伊藤 これは、その後はつくられなかったのか、それともつくったものを焼却したのか。

波多野 僕も昭和18年、19年といったところを探しているんですけれども、どうもつくられなかったようですね。19年、20年というところはですね。外務省そのものが、大東亜省に吸収されて、規模が小さくなってしまったということもあるんですけれども。現在、探しておりますのは、「外務省外交史料編集委員会」というのが終戦直後にできまして、現在、この編集委員会が10数人によって構成されているんですけれども、残っているのがこの2つなんですね。これは、「外交資料・日ソ外交交渉記録ノ部」というタイトルが

ついているんですが、戦時中の日ソ交渉について非常に詳しくまとめている、戦時中の文書が少ないだけに非常に貴重なものです。

伊藤 これは何を元にしてつくったんですかね。これは1946年2月でしょ。

波多野 に刊行しているわけですね。で、担当事務官の手元に残っていたものだろうと思うんですね。次の「外交資料・日仏印関係ノ部」というものも、これは私が古本屋で買ったものですが、これが外務省にないんですね。外交史料館にない、非常に貴重だということがわかりました。これも、フランス領インドシナと日本の、仏印進駐から日本が占領する45年3月までの、非常に詳しい経過を記述したものなんですけれども。

伊藤 外交資料というんですが、要するに記述なんですか、それとも資料？

波多野 資料です。記述と資料ですね。印刷してありますので、何部かはつくったろうと思うんですけれども。

伊藤 いま古本屋でお買いになったということですが、それは個人でお買いになったんですか。

波多野 ええ、古本屋のリストに載っておりまして、10万円を出しまして買ってみたら、非常に貴重だということがわかったんです。

伊藤 それでどうなったんですか。外務省資料についてと書いてあるから、外務省が持っている資料かと思ったんですが。

波多野 持っている資料かと思ったんですけれども、これだけは持ってなかったんですよ。それでコピーを差し上げたんですけれども。よく、戦争中の外務省の記録を見ますと、つくろうとした形跡があることがわかるんですね。たとえば日本とインドの関係について、外務省外交資料編集委員会の手書きの資料が残っていたりしまして、つくろうとした形跡はあるんです。他の地域について、たとえばインドネシアとかマレーという地域について、おそらくつくろうとしたんだらうと思うんですけれども、いまのところ残っているのはその2つということです。

伊藤 委員会自体は、1945年にできているわけですか。

波多野 ええ。

伊藤 45年というのは……

波多野 戦後ですね。

伊藤 そうするとやっぱり、戦後にさうとう資料が残っていたということではあるんですね。

波多野 おそらく、占領軍が持っていく前ということにもなるんですけれども。

塩崎 たとえば委員の名前なんかは、チェックできるんですか。

波多野 わかります。それは書いてありますから。

塩崎 委員長というのは、誰だったんですか。

波多野 委員の名簿だけはずっと載っておりまして、誰が委員長ということは書いてないですね。委員会をつくって、こういう人が委員だと。

次に、「戦後外交記録」について。76年・昭和51年から現在まで、外務省は14回に渡って戦後外交記録を公開しているわけです。そのつど、新聞その他で紹介がありますし、また外交史料館がつくった索引もありますから、よくご存じだと思うんですけども。それぞれ配付されている方もいらっしゃると思うんですけども。

伊藤 ただ、配付しているのは、ジャーナリズムに配付してるんじゃないですか。

波多野 マイクロフィルムそのものをという意味ですか。

伊藤 いやいや、リストを。

波多野 検索簿というやつですね。簡単なインデックスですね。

伊藤 一般には配付してない？

波多野 一般には配付してないんですけども。

伊藤 だから、ジャーナリストに知り合いがいれば手に入りますが。

波多野 私はいつももらっているものですから、みんなに行ってるのかなと思ったりしてるんですけど。

伊藤 いやいや（笑）。これはちょっと、貸してください。コピーします。

波多野 史料館に、閲覧室に置いてあるやつですね。

伊藤 あれ、コピーできないから。

波多野 わかりました。それである程度検討がつくんですけども、ただ13回、14回から非常に変わってきたということだけを、ちょっと申し上げておきたいんですけども。13回目から、公開する量が5倍ぐらいになったわけです。全体の量が、それまでは1000冊たらずだったんですけども、13回目からは5000冊、6000冊というものを公開するようになったんです。それはどうやって可能だったかと言いますと、13回、14回からは、主要案件と一般案件という分け方をするようになったわけです。主要案件というのは、二国間あるいは多数国間の重要案件について、審査をするということですけども、一般案件というのを区別しまして、審査の仕組みを非常に簡略化しまして、一つひとつの文章を見るのではなくて、ざっと母冊の表題とかを見て、もうこれでいいというふうにして公開すると。そういうものと区別したわけですね。それで大量に公開するのが可能になったということです。

従って、比較的外交問題としては重要でないという外務省が判断しているものについては、みな一般案件に回されるという傾向があるわけですね。たとえばそこに書いておきましたけれども、各国の内政、各国の外交、各国の経済、そして国際機関の議事録、文化交流といったものが全て、ほとんど公開されています。範囲も、45年と書きましたけれども、51年～70年まで公開されています。ただし一般案件は、確かに外交問題として日本外務

省にとっては重要でなかったかもしれませんが、研究という立場から見ると非常に貴重なものであることがわかります。たとえば各国内政という項目がありまして、これは各国の内政状況について、現地の大使館なり公使館なりが報告してくるものですね。本省に報告してくる電報類あるいは報告書、調書といったようなものです。たとえばアジアですと、中国、台湾、そしてインドネシア、その他のアジア地域の全ての現地からの報告を集めています。内政に関するもの、そして外交に関するもの、経済に関するものというふうに、国別、科目別に分けてはいますけれども。

私がこれを見ていまして、たとえばインドネシアの9・30事件というのが65年に起こりますけれども、その時に斉藤鎮男大使が現地にいまして、克明に逐一情報を伝えてくるのが、非常に貴重なんですね。そういうものまで含まれております。たとえばフィリピンですと、フィリピンのフク団・・フクバラハップにどう対応するかという、現地の大使館員とそして当時の大統領府の要人との会見が行われている様子とか、そういうものが逐一入ってくるというので、これは地理研究という点からみれば非常に貴重だと思うんです。そういうものが大量に公開をされました。文化交流に関係するものも全て公開されました。従って、増えてきているわけですが。一般案件と主要案件というふうに、先ほどの検索簿のなかでも分類しているわけですね。外交史をやっている人はみんな主要案件のほうを注目するんですけれども、一般案件のほうも非常に貴重だということです。

それから、これには書いてごさいませんが、戦争裁判の記録が14回の公開の時にかなりの量が公開されました。

伊藤 BC級ですか。

波多野 BC級の、外交史料館が現在持っているものはほとんど出ていると思います。戦後の外交記録は、ほとんどがマイクロフィルムで公開しているわけですね。マイクロフィルムを買うのは1本7000円ぐらいですから、コピーを業者に発注するよりは、マイクロフィルムで買ってそれをコピーするなりリールで見るなりするほうが良いと思うんですけれども。

伊藤 フィルムを売っているわけですか。

波多野 ええ、フィルムを1本で買うことができますね。部分的なフィルムにすることも可能ですけれども。効率的という点では、1本全部買ってしまったほうが良いですね。

伊藤 これは、原本はどこにあるんですか。

波多野 本省です。

伊藤 外交史料館ではなくて？

波多野 ええ、外交史料館ではありません。本省の記録公開室というのがありますけれども。

伊藤 マイクロフィルムを買う場合は、どこに？

波多野 それは外交史料館で。

伊藤 外交史料館に申し込むわけですか。

波多野 はい。

伊藤 窓口だけが外交史料館にあるということですか。

波多野 はい。ただ、マイクロフィルムでないものもじつはあるんですね。調書の類、本になっているようなものですね。ああいうものはマイクロフィルムではないんです。いちいち、この調書を見たいというので注文して、2、3日してからまた来るというふうになっているんですね。

伊藤 原本で見せるものもあるわけですね。

波多野 ええ、あります。30年ルールということで公開をやっているわけなんですけれども、主要案件、一般案件という区分によって大量に公開を促進するようになったと。それはけっこうなんですけれども、やはり主要案件のほうで、安全保障とか領土とかプライバシーとか、そういう問題に関わるものは非常に慎重に審査をするわけですね。現在のところ、外務省だけが省庁のなかでは継続的に公開しているという事情があるものですから、各省庁に気を配ってやってるものですから、どうしても後向きになるという傾向は否めないわけですね。

ただ、紙屑ばかという、そういう批評も当たっていないと思いますね。戦後の外交文書を見に来る人は、そう多くないんですね。公開する前に予め新聞社に内容を公表しまして、新聞が大きく報じますね。そうすると、非常につまらないものばかりのように見えて、なかなか利用者が増えないということのようです。

伊藤 僕も、リストを見せられて「これについてどう思うか」という取材を受けたりするんですけども、だいたい記者の諸君はよくわかってないんですよ。とてもじゃない、内容を書けるわけがないなと思っているんですけど。

波多野 たとえば60年安保、あるいは講和条約もそうですけれども、西村熊雄さんの業務日誌とか、そういうものの存在は知られているわけですけども、あれがまだ出ていない。

伊藤 それは外務省が持っているんですか。

波多野 ええ、外務省記録のなかにあるといわれています。

伊藤 あれは、いっぺんスクリーンにかけて、30年のあれですね。それで、いっぺんやったものをまた次の時にもういっぺん見直すということはやってるのかしら。

波多野 いや、いまそういう余裕はないと思いますね。

伊藤 30年たったものを、とにかくまずやるという。

波多野 ええ。前のものを見直すというような余裕は、とてもないと思います。

伊藤 それは、担当の人の人数が少ないということですか。

波多野 そうですね。だいたい、総領事くらいで定年になった方がやってらっしゃるわけですし。

伊藤 ちょっと話がずれるかもしれませんが、今度の情報公開の問題と絡んで、いったいどういうことになるのかなと思うんですが。波多野さんはどういうお考えですか。

波多野 情報公開法が、外務省文書も行政文書に含まれわけですので、それを全て公開するという、やっぱりその原則に従うことになりますね。そうすると、ある意味では公開作業というものは意味がなくなるということもあるわけですね。つまり、要求に応じて、ある読者がこういうものを見たいと。じゃあ、その案件について審査をして、「はい、いいですよ」と見せる。そういう仕組みになってしまうんじゃないかという恐れがありますね。つまり、積極的に公開していくというよりもですね。いまのような仕組みで、遅い早いはあるんですけども、公表、公開していくというよりも、むしろ利用者の請求に応じて公開をするという方向に変わるのではないかなという感じもありますね。つまり、公開そのものという点からすれば、後退するんじゃないかと思えますね。

伊藤 30年ルールであっても、いまのような形で少しずつ進化していくというほうが、ベターだったんじゃないかという感じがするのですが。

波多野 積極的に公開していくというような姿勢は失われるでしょうね。

梶田 ただそれは、いわゆる現用文書とそうじゃない文書というのはきちっと区別されるわけで。外交史料館は外交文書、歴史的な文書として規定したものとして考えれば、いままで通りやっていけばいいわけですよ。

波多野 そうですね。公開振り分けの作業は、4、5年前までは外交史料館でやっていたんですが、4、5年前からはもう本省で全部やっています。そういう違いもありまして、どの範囲が現用文書かということについても議論があるようですけども。確かに、情報公開法によってどう対応するかという問題は、いま省内でも議論があるということは聞いております。

伊藤 いま、外務省はどうかわかりませんが、各省庁の場合に、局、課で資料を持っていて、昔のように省としてまとめて記録を編綴していくというやり方は、あまりやってないと思うんですよ。そこに情報公開法が出てきた時に、いったいどういうふうに対応するんだろうかなと思ってはるんですけどね。外務省だって、外交電報やなんか、外からのものは全部きちんと把握できるんでしょうけれども、局が独自にやっていることは完全には把握しきれないでしょう。

波多野 そうですね。それは他の省庁でも同じだろうと思うんですけども。

伊藤 他の課に知られないようにということで、やってることだってあるわけですからね。

中見 おそらく、外務省は別なんじゃないですかね。文書課というのは、いまはもうな

なくなったけど、戦前の場合をいうと、ある時点で何とか一件でファイルをつくるわけでしょう。その伝統はいまでも続いているのでしょうか。外務省本省のなかに大金庫があって、そこにファイルが入る。今回、戦後史料の公開の場合、OBの外交官が公開すべきところに付箋を着けて、要するにマイクロ屋が撮るわけですね。それで公開すると。その文書自体は金庫に戻るわけだと思います。

たとえば、たまたま外務省の中国課なり条約局が戦後のあれを欲しいといたら、金庫から出して使うわけでしょう。だからある意味で各課の、たとえば北米局の第一課とかなんかに史料が溜まっているということは、外務省はないわけですね。ただし非常に機密を要するものは、むしろ大臣官房とかそういうところでの金庫に入っているということで、これはもう問題が終わらない限りはファイルされないわけでしょう。だから、他の省の、たとえば厚生省のエイズの審議会の記録がどうのこうのというような文書保管の仕方とは、外務省は違うでしょうけど。

波多野 おそらく他の国内官庁と、外務省は違うと思うんですね。いまのように、ある一件が完全に終わらない限り、局ごとに下ろしてまとめるということをしなないと思うんですね。

中見 ただ、おそらくこのいまの忙しい時代に、戦後史料が大量に出てきて、最大の問題は、ファイルになる場合にどの程度資料が残されて、途中で消えるのかという問題でしょう。それから、はっきり言えば外務省なんて本当に重要な機密交渉には関与していない場合もあるし、政治家が出てきたりするわけでしょう、日韓会議とかはね。だから、実際に安全保障なんていうのは、残されている外交史料にどの程度真実が、情報が出てくるかと。つまり、日米安保の特定の問題については、何とかという京都産業大学のあの人の史料を見たほうがはっきりすることですしね。そういう問題じゃないですかね。

波多野 そうですね、文書資料の形でどれだけ残るかということもございますね。

先に進ませていただきますと、外務省の関係では、「内田康哉の伝記資料」というのはなかなか貴重なものだ。「内田康哉」という伝記は出ておりますけれども、それは伝記資料をだいたい4分の1ぐらいに圧縮してあるわけですね。伝記資料そのものを見ましたけれども、刊行された伝記とはちょっと違って、いいものだ。「内田日記」というのはじつはあったのでありますが、これが昭和17年1月に外務省が火災になりまして、焼けた時に無くなったという事情のようです。

伊藤 消えて無くなったじゃなくて、焼けて失ったですか。

波多野 そうです。ただ、焼けなかったという人もいましてですね（笑）。残ってるんだという人もいまして、持ってる人がいるという話を聞いて、ここにちょっと書いたんですけども。消失というのは、？ということですね。

林出さんのものはよくご存じのように、外交史料館と国会図書館に分散されておしまし

て、これは出版することになりました。マイクロフィルムで出版されるようです。

伊藤 全部ですか。

波多野 全部です。マイクロフィルムです。

伊藤 しかし大量だろうから、値段がすごいらうな。

波多野 私も、和歌山の林出さんの家に2回ばかり行ったんですけども、すごい量ですね。

伊藤 何10リールってなるんでしょう。

波多野 そうですね、どのくらいになるんでしょうね。5、60はいくと思いますね。

伊藤 何セットも売れるわけがないだろうから。

波多野 面白いのは、溥儀との会見なんですね。溥儀と関東軍司令官、あるいは国務院総理と日本側の会見録が。

その他というふうに書きましたけれども、私がちょっと気をつけてきたものであります。「須磨弥吉郎史料」とあります。これは須磨史料と言われまして、須磨未知秋さんというご長男の方ですけども、彼が伝記を書こうということで、防衛庁の戦史部に史料を預けておられたと。おそらく西浦進さんとの関係が深い方でありましたので、そこに預けられたということだと思います。それが昭和34年と聞いておりますけれども。そこで伝記を書こうということになりまして、返してほしいというので、戦史部はその史料を返しました。ところが私が調べた範囲では、ここに書いておりますような「西南政局論集」とか「帝国対外国策」といったものが、原文書が残っているんですね。これはどうしたものかということで、未知秋さんにもお尋ねしたりしたんですけども、結局、50数点の須磨資料というのがあるんですけども、現在もまだ未知秋さんのお手許にあるわけです。戦史部に所蔵されたものは、未返還のものはコピーをして未知秋さんのところにお届けしたという経緯があるものです。

出淵さんの日記があります。これは高橋勝浩さんが中心になってもうすぐ出版をするということですが、これは外務省にはないものですね。

次の「市谷台史料」というのがあります。市ヶ谷台というのは、参謀本部のあった市ヶ谷台です。ここに「市ヶ谷台史料」というのがあります。溝部さんが書かれたもので、ここに経過が書いてございますけれども、市ヶ谷の建物を壊した時に焼け残っていたものが見つかったというものであります。

伊藤 秦郁彦さんが一所懸命やってたですね。

波多野 そうです。それを整理しつつあるから、もうすぐ戦史部に入ると。そういう趣旨のことが書かれております。こういうものが一体どこに残っていたのか、何回も行ってはいるんですが見当がつかないんですけども、なぜどこにということですね。「市ヶ谷台史料」というのはそういうものであります。

「内外法制研究会研究資料」というのがございます。これはいまコピーを撮っていた
いているものでありますが、やはり終戦後に、東京裁判に政府として組織的に対応するた
めに、特に被告の弁護のために外務省の関係者が中心になって、資料収集そして資料の取
りまとめを行おうということのできた研究会であります。そこが研究資料と称する資料を
全部で 180 点ぐらいの資料をつくっていると思うんですけども、これがあちこちに散
在しているということになります。いまお配りしているのは、防衛庁にある内外法制研究
会の資料ということになります。私が知っているのは、国学院大学の図書館にだいたい
20 点ぐらいあると。他にもあるだろうと思うんですけども。

伊藤 僕もいくつか見ているんですが、東大の社研にもかなりありますし、それから
佐々さんの文書だったかな。

波多野 あるいはそうかもしれませんね。協力者のなかにですね。

伊藤 矢部貞治さんのなかにも……。

波多野 矢部さんもあると思います。

伊藤 これ、僕も前から全部揃えたいもんだなと思っていたんですが。著者、話者とい
うところで、空白になっているところがずいぶんありますね。誰かが、誰というふうに書
いておいてくれたものはある程度わかるんですけども、そうでないものはなかなかわか
りにくいんですね。「内外法制研究会研究資料」は、若いほうの番号のやつがずいぶん少
ないですね。

波多野 そうなんですね。

伊藤 若いほうのやつは、たとえばニュルンベルグ裁判の法的な研究とかいったものは
多少あったと思います。談話録あるいは座談会ですね。座談会もだから、ABCというふ
うに人の名前がなっているもので、誰と誰と誰が話してるのかよくわからないのありま
す。じゃあ、僕のつくったリストもお送りします。

波多野 お願いします。ちょっと合わせてみたいと思ってるんですが。

次の「阿南メモ」は、阿南陸軍大臣の、この短い期間のものであります。入手経緯はち
よっと忘れてしまったんですけども。

伊藤 これは、日記とは別？

波多野 同じものだと思います。メモ風の、日記といえば日記で。

伊藤 非常に簡単な記述じゃありませんか。

波多野 簡単です。同じものだと思います。

次の「大竹貞雄資料」は、杉田一次さんという、参謀本部、欧米課に長く勤務された方
の下で通訳などをされていた方でありまして、その人が集められたものでありまして、この
目録も、皆さんは必要ないかと思いますが、いちおう持っておりますので、あとでここで
ひとつとっていただければ。これは、日米交渉の 41 年 4 月からだいたい 8 月頃までにか

けての、第二部、情報部の分析、あるいはアメリカ側から来た案に対する情報部の意見のようなものが含まれております。

伊藤 いつからですか。

波多野 だいたい41年4月から。

伊藤 じゃあ、正式に提起されてからですね。

波多野 そうですね。それ以前のものはないですね。

次の武部六蔵さん、星子敏雄さんというのは、満州の関係であります。武部さんのものは、現在も外交史料館の嘱託をされてます河村一夫さんという方を通じて知ったものであります。

伊藤 古川隆久君が出すと言ってるのと同じかな？

波多野 いや、私はちょっと、そのことは知らないです。同じかもしれません。

伊藤 この「父の日記より」という、この日記は備忘録のことを指してるんですよね。

波多野 ええ、そうなんです。

伊藤 それじゃあ、同じものなんだ。

波多野 星子敏雄さんという、一昨年亡くなったんですが、熊本市長を長くやられていた方で、ここに書いたような経歴で、満州国の建国の時には活躍された方でありまして、熊本の家にも2回ばかりお伺いしたことがあります、若干あるということでありまして。

次の「服部（卓四郎）史料」は、一部、戦史部にありました。あるんですが、現在はおそらく防衛庁本庁の六本木の資料室に移っていると思うんです。服部さんは、GHQのG2の庇護の下に、服部機関と言われるような組織をつくられたわけですけども。その服部さんの主宰されていた史実研究所というのがありまして、ここで先ほどの隠遁した陸海軍文書を集めまして、そして昭和28年に『大東亜戦争全史』という本をつくったわけです。その後、服部さんが亡くなって、戦史部にそれが移ってきたという経緯になるわけですね。

それとは別に、服部さんの仕事といいますか、史実研究所は再軍備の研究をやっていたことで知られるわけですね。鳩山時代に至るまで、再軍備に関する意見やら研究をたくさんつくっているわけなんです。そういうものが服部史料として、再軍備に関する研究ということで、昔は戦史部には残っていたんですね。ところが本庁史をつくるということになりまして、向こうへ移管されているんです。防衛庁だけが本庁史がない官庁なんです、部隊史とかそういうものはたくさんあるんですけども。なかなか内局と三幕の資料が出なくて、本庁史が防衛庁の場合にはできないという状態で、もう10年ぐらい経過しているんですけども。

伊藤 ずいぶん前から話は聞いていますけれども、終了に近いとか、そういう話ではないですか。

波多野 草稿はできているんですね。少なくとも保安庁ができるまでの草稿はできていると聞いております。本格的な防衛庁の前身ができる保安庁時代からのものがなかなか進まないということのようです。予備隊史のようなものになってしまうんじゃないかと思うんですけれども。

伊藤 後藤田さんはじめ、警察予備隊関係の人がたくさんいるわけだしね。

波多野 そうですね。

この「堂場肇文書」も、防衛庁ではありませんけれども再軍備に関係するもので、私も少し見たんですが。堂場さんの文書は非常に貴重なものですが、これに比べると本庁史を集めている資料室は非常に貧弱といえば貧弱なんですね。内局とか三幕から出た文書って、ほとんどないわけです。出さないもんですから。むしろ堂場さんの文書のほうが……なぜこういうものが出ているのか不思議なんですけれども。堂場さんは新聞記者として・・防衛記者ですよ・・集められていますけれども、入手の経緯がよくわからないんですね。

以上のようなことで、最後に昭和館について。この4月に開館しまして、当初は戦没者遺児追悼記念館という計画で10年以上前から進んでおりました。紆余曲折がありまして、結局、昭和館ということで開館することになったわけです。私は4、5年前からこの史料委員会などをやっております、その関係で関係が浅からぬものがあるんですけれども。最終的にできあがったのが、お示した運営管理体制というような組織になったわけです。遺族会と厚生省の関係がそこに書いてございますが、厚生省が遺族会に管理を委託するという形をとっているわけですね。厚生省のなかには運営審議委員会がありまして、遺族会のほうには運営専門委員会がある。というような役割分担でなっているわけです。

これは、遺族会という特定の歴史観を押しつけるという批判もあったんですけれども、厚生省としては援護事業のひとつだということで、国会承認になったわけです。当初は、戦争に至る経緯のようなもの、あるいは日本がアジア各地に進出していった、アジア各地の側のこともじつは展示とか収集資料の範囲に入れるはずだったんですけれども、結局、戦争への道というような企画案を厚生省がつくりまして公表したところ、やはり遺族会の歴史観が非常に反映しているということで、つまりアジア各国の立場での視点が足りないというような批判が起こりまして、戦争に至る道とか、あるいは空襲とか、とにかく戦争に関わる展示とか収集資料というものはすべてやめになりまして、内地中心の国民生活資料館ですね。簡単にいえば国民生活資料館のようなものになりました。

すでに訪問された方はあるかと思うんですけれども、昭和10年からだいたい昭和30年までの間の、国民生活に関わる現物の展示とそして資料の検索ということになります。基本的に2つの事業をやっております。1つは展示という作業ですね。千人針とか当時の慰問袋とかいうものを展示すると。そしてもう1つは、資料の検索事業ということですよ。

料の収集そのものはあまりやらなくて、検索をしやすくする。各地にある文書館、博物館を結んで、検索システムをしっかりしたものにするというのが狙いです。

いったいどういうものを収集しているのかというのを、2枚目に書いてあります。特徴は、文書資料というよりも雑誌のバックナンバーを非常に重点的に揃えていることなんです。これは非常に熱心に進めておまして、これらをすべてCD-ROMに取り込んで、そして検索ルームで、たとえば「中央公論」の何月号のどの記事かというと、その記事を検索するだけではなくて、その内容まで画像で見れるという仕組みをつくっています。いまのところ、記事の内容、全文まで画像に現れるというのは、おそらくこしかないだらうというふうに思います。ここに書いてございますような雑誌はほとんど揃えております。

もうひとつは、「戦史叢書」をすべてCD-ROM化しまして、データベースをつくって、人名を入れるとパパパッと関係するあれが出てきて、自分はどこにいたということがはっきりわかると。そういうような仕組みをつくっています。

伊藤 全部、打ち込んだわけですか。

波多野 そうです、全部打ち込んだみたいですね。すごい作業だと思うんですがね。それは戸高さんがやってるわけです。だから、戸高さんにその仕組みをぜひとも聞いていただいて。

伊藤 外注に出したんでしょうけれども、労働力としても大変な労力があるわけでしょう。

波多野 もっとも、他の官庁と比べて厚生省はお金がありますからね。資料の、もちろん展示物だけではなくて、そういう検索ルームがあって、こういったものを検索できて、独自の図書も収集してるんですね。そして、先ほど申し上げた海軍文庫のものは全部ここにあります。

それから映像ですね。たとえばアメリカでかなりのものを集めておりますけれども、映像資料もたくさん持っております。

伊藤 波多野さんは、このなかでどういう役割をしてるんですか。

波多野 私は、14ページに書いてございますが、運営専門委員会というのがあります。その委員なんです。

伊藤 委員長はどなたですか。

波多野 委員長は前の国会図書館副館長だった、宮脇さん。国会図書館が使っているジャパンマークという検索システムと連動してやってるんです。そういう検索システムをつくるという点では、ここがいちばん進んでるんじゃないかと思うんです、ノウハウについては。物と資料を収集するのに、遺族会を使うわけですね。遺族会とか老人クラブとかを使って、広告を出しまして、そうするとたくさん集まって、特に千人針なんかはたくさん集まり過ぎて置く場所に困っているという話を聞きましたけれども。

伊藤 あなたの属している専門委員会というのは、しょっちゅう開かれるんですか。

波多野 いや、年に数回です。準備段階では秦先生もいらっしゃったんですけども、そういう有力な歴史家がみんな辞めちゃいましたので私だけが残りで、あとは映像技術の専門家とか、そういう方ばかりなんですよ。

伊藤 秦さんも逃げちゃったわけか。

波多野 私も、辞めるに辞められなくて（笑）。

伊藤 一度、行ってみましょう。僕がいちばん関心があるのは、海軍文庫のものがいいかどうかという具合になっているのか。

波多野 戸高さんに、ぜひとも。

伊藤 戸高さんに一度ここに来ていただいて、お話いただくと。

波多野 それがよくないかなと思います。

伊藤 この研究会で目録を集めているんですが、お持ちの目録をぜひコピーさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。それから、この研究会でご報告をいただいた方には以後研究会のご案内をさしあげますので、ご興味のある時にはぜひお出でください。そろそろ時間ですので終わりたいと思いますが、なにかご質問があれば。

小宮 「堂場肇文書」が最近、再軍備の研究でよく使われているんですが、だいたいどの程度の量があるんですか。

波多野 僕も全容は把握してないんですけども、かなりの量だと思いますね。

小宮 それは、たとえば昭和30年代から40年代の安全保障問題とかその周辺の資料もあって、だいたい堂場さんが現役の記者をやられていた時期のものは、ほぼ？

波多野 おそらく20年代の終わりから、40年代もあると思いますね。

武田 私も見ました。いま、阪中友久先生が移られたので、六本木のほうにあるんですね。

波多野 そうです、移りましたね。

小宮 猪木先生が理事長をされていたところですよ。

波多野 そうですね。

伊藤 所有関係はどうなってるの。

小宮 慶応の中島信吾さんの論文によると、平和・安全保障研究所でしたっけ、そこに今はあるみたいですね。あれはだから、青学の時は要するに、阪中先生が所蔵されていたんですね。

武田 阪中友久先生が移ったので、移られたんだと思います。

伊藤 史料も一緒に移ったと。

波多野 そうですね。阪中さんがおられたものですから、青山学院にあったという。青山にある必然は全然なかったんです。

伊藤 貴重なお話を、どうもありがとうございました。

(終わり)